議会だより 第49号

内子町議会議員研修の報告

「第52回四国地区町村議会議長会研修会」が11月10日、徳島県鳴門市文化会館で開かれました。

研修会の様子

第52回四国地区町村議会議長会研修に参加して

総務常任委員　池田　洋助（ようすけ）

第1部では、「これからの防災・危機管理～自然災害に町村はどう対応するか～」という演題で、テレビでおなじみの山村武彦（たけひこ）防災システム研究所所長が講演を行いました。

山村所長は「真実と教訓は現場にあり」と現場主義を掲げ、今まで地震・津波・噴火・土砂災害・テロ・事故など世界150カ所以上の災害現地で調査を行っています。映像を交えた説明は非常に生々しく、甚大（じんだい）な被害の実情が伝わってきました。

内子町では東日本大震災のような津波被害は想定されませんが、地震による家屋の倒壊や火災、土砂崩れなどが発生する恐れがあります。これらに対する危機意識を持ち、地域住民の生命や財産を守っていくための教訓を具体的に教わりました。

特に印象に残った提言は次のような内容です。

○向こう三軒両隣を大事にしていかなければならない。

○普段できなければ、非常時もできない。

○「日ごろのご近助ネットワーク」が大切。自助・近助・共助の大切さ。

○とにかく、まず自分を守ってこそ人が守れる。

○住民の立ち位置（守られる人から、守る人へ）を変える意識改革

○安全ゾーンとは、転倒落下物の少ない、閉じ込められない場所

あらためて、平常時からの意識啓発による防災意識の見直しの重要性を強く考える機会となりました。

今後は「近助の精神」を忘れることなく、身体が元気なうちは助けられる人から助ける人へ、守られる人から守る人へと立ち位置を変え、隣人に関心を持ち、必要なときは見返りを求めずに地域や隣人を助ける、傍観者にならない心を大切にしていきたいと思います。

また今回の東日本大震災で、津波が町を襲う中、住民の命を救おうと防災無線で避難を呼び掛け続けて亡くなった宮城県南三陸町職員の責任感ある行為に感銘するとともに、多くのことを考えさせられました。

この防災無線の呼び掛けは、住民への非常事態に対する叫びであり、緊急時の放送の在り方について職員の訓練が必要になると教えられました。「こちらは内子町役場です。地震が発生しました。皆さん落ち着いて行動してください。火の元を切って避難場所に避難してください」ではなく、「逃げろー、逃げろー」と切迫した声で避難指示を出さなければならないということです。そして何よりも自分自身の安全の確保、次に家族、それから向こう三軒両隣の安全確保を行うということです。

先日、各自治会で自主防災訓練が行われましたが、避難訓練や安否確認など、緊張感を持ってこそ実際の災害時の対応につながるものと確信しています。

第52回四国地区町村議会議長会研修に参加して

総務常任委員　中田　厚寛（あつひろ）

第2部では、瀬戸内寂聴（じゃくちょう）さんの講演がありました。

寂聴さんは1922年5月15日に徳島市に生を受け、徳島県立高等女学校、東京女子大学国語専攻部を卒業後、1973年に中尊寺で出家して尼となりました。徳島市名誉市民、京都市名誉市民の称号を受けています。作家としての主な受賞歴は、女流文学賞('63)、谷崎潤一郎賞('92)、芸術選奨('95)、文化功労者('97)、野間文芸賞('01)、文化勲章('06)。代表作として『夏の終わりに』『花に問え』『場所』『白道』『源氏物語現代語訳』など。小説だけで何百冊になるとのお話でした。

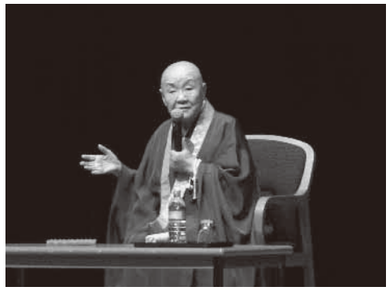
壇上ではとても90歳が近いとは思えないほどハキハキとした言葉で話し、1300人が参加した会場全体に目配りが行き届き聞きやすい講演でした。

演題は「天災と人災」。東日本大震災の時は腰を患って入院していたそうですが、津波の映像がテレビに映し出された瞬間ベッドから降り立っていたということです。長く寝たきりで動けない状態だったのに、人間の本能が「何かしなくては」という気持ちにさせたのかと、本人も驚いたと話していました。

寂聴さんが仏門の道に進んだのは、同じような恋愛小説ばかり書いて一生を終えたくないと思ったからだといいます。何かもう少し違った生きる道はないかと修道女を志すものの、一度は断念。しかし1973年に出家し、法名を寂聴としました。その後尼僧として熱心に活動し、週末には青空説法を行っていたそうです。

また、これまでに多くの犯罪者の更生に力を尽くしており、死刑廃止論者でもあります。脳死による臓器移植にも反対しています。

1991年2月には湾岸戦争の停戦を祈って7日間の断食を行い、4月には救援のための募金や薬を持ってイラクを訪問。同時多発テロの報復攻撃にも抗議し、短期間のハンガーストライキを決行しました。また原子力発電にも反対の立場で、「残りの生涯は、反原発運動に携わりたい」と語っていました。


瀬戸内寂聴さん

2005年に寂聴さんを主人公としたテレビドラマ「女の一代記」が放映されました。この中で、東京に住みだした後、二人の男性と恋愛関係にあったと語っています。地方講演などでは、主に「笑うこと」が大切であるということを説き、座右の銘は「生きることは、愛すること」だと話していました。

2007年8月11日、館長を務める徳島県立文学書道館（徳島市）での講演で、加齢黄斑変性のため右目の視界の大部分が見えなくなったということを明かしました。

東日本大震災の後は、何回となく被災地を訪れて慰問しているそうです。多忙の中、地方にまで講演に来て私たちに話を聞かせてくださったことに感謝しました。

その他、自治功労者の表彰も行われました。これは町村議会議員として20年わたり地方自治の振興発展に寄与した人に贈られるもので、四国で11人、愛媛県からは上島町の3人が受賞しました。

この日一日、良い勉強をさせていただき感謝々々の一日でした。

自治功労者表彰の様子